

京都市中京区 塩見 英三 (92歳)

学徒動員の思い出

昭和19年の7月、米軍の反攻によるサイパン島で激戦の最中、僕たち旧制中等学校の3年生以上全員が、学徒勤労働員令により7月3日、京都市から100キロも離れた東舞鶴に向かった。

当時主食の米をはじめ、ほとんどの生活必需物資は統制され、配給制度の下で不自由な生活をしてきたが、「欲しがりません勝つまでは」の標語の通り耐え忍んできたところだ。

山陰線はトンネルが多く、機関車の煙が隙間から入り、窓を閉めても煙たかった。綾部で乗り換え更に進んで東舞鶴駅に到着。駅前広場に整列した片方には、幾柱かの英霊が白布に包まれた箱の中に、舞鶴出身の方が無言で凱旋されたその光景を見て目礼しながら、宿舎のある森四寄まで歩く。トランクなどの手荷物は錨のマークのついたトラックが運んでくれた。15分ほど歩いて宿舎に着く。舎前に整列し、舎官に敬礼をし着任の報告後訓示を受ける。その後各組の部屋割りがあり、一部屋に7人が入る。いよいよ今日から集団生活が始まる。今までとは違って、規則正しい生活をする指針日課が事細かく定められている。特に朝の起床午前4時55分「総員起こし5分前」から始まる各種の事柄は全く軍隊と変わらない。そして1週間ほどは軍歌演習をしたり、中舞鶴の共楽公園まで行軍したりし、10日から実習作業に入る。場所は「海軍機関学校内の作業場」で7月31日まで工廠の指導員が5名、厳しい毎日の実習訓練に僕たちは歯を食いしばる。

7月19日、大槻組長よりサイパン島玉砕の戦況を聞く。小林指導員から藤田東湖（水戸藩の儒者）の「正気の歌」を覚えてもらう。「天地正大気粹然鍾神州」からスタートして最後まで毎日暗誦させられた。

7月30日朝、30℃近い気温の中、僕たちはいつもと違って尻崎に向かって急いだ。新鋭駆逐艦「榎（かや）」の進水式を見学するのである。船台の見える場所で待機していると、午前8時30分支綱が切られ、船台から海に向かってすべり出すと同時に軍楽隊の奏でる軍艦マーチが響き渡った。艦は無事海上にあり、以後1カ月、偽装工事を終えて海軍省に引き渡されるそうだ。

8月1日、今日から工廠内の工場で働くことになる。造機部器具工場燻燃器工場で作業することになる。私たちは2階のゲージ場で、最初は4艇の推進器のゲージを作り、その後真鍮のスクリューをゲージに合わせ、やすりで削る作業が毎日続く。工員さんの中には徴用で来た人や、養成所を出た人などだった。

11月18日、見たこともない大きな艦が入港していた。誰ともなしに聞くとところによると、「巡洋艦利根」で、修理のため母港の舞鶴に回港されて来たのだ。これがほんまの軍艦か！

そしてその頃になると、教練査閲のため毎日練習があり、11月23日海軍兵学校舞鶴分校の練兵場で実施された。分列行進から始まり各個教練、密集教練、銃剣術などを受閲する。査閲の講評は優秀なりで終わった。そして天候が雨から雪にかわる頃、雁又地区の疎開工

場に転属を命ぜられ、必勝の信念を胸に卒業まで空腹を抱え、勝利の日を夢見て作業を続けたのです。